

新潮文庫

冬の旅

立原正秋 著



新潮社

92329

I313. 4
J143

ふゆ 冬 の

新潮文庫



昭和四十八年五月二十五日 発行
昭和五十七年五月三十日 二十六刷

著 者 立 原 正 秋

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一 六 二

東京 都 新宿 区 矢 来 町 七 一

電話 業務 部 (〇三)二六六一五一
編集 部 (〇三)二六六一五四〇

振 替 東京 四 一 八 〇 八 番

定 価 は カ バ ー に 表 示 し て あ り ま す 。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛と送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

⊙ 印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

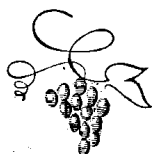
© Mitsuyo Tachihara 1973 Printed in Japan

ISBN4-10-109502-7 C0193

新潮文庫

冬の旅

立原正秋 著



新潮社 版

2130

冬
の
旅

別れ霜

護送車の金網ごしに見える外界の新緑が眩しかった。外の景色を眺められるのはほぼ一カ月ぶりだな、と宇野行助は移り行く風景を新鮮な思いで受けとめた。新緑にまじった家々の庭に赤い躑躅の花も咲いていた。それらの樹木に、早い午前の陽の光が碎け散っていた。白い壁の家も見えた。壁の白さが目にしみた。四週間を鉄格子のなかで暮してきた行助に、それらの風景は彩りがありすぎ、感動的ですらあった。

「ちえッ、娑婆では花が咲いてらあ」

と誰かが言った。護送車のなかには七人の少年がのっていた。

「ほんとだ。あかい花と白い花が咲いているぜ。とにかく外には色があるなあ」

と行助のとなりにいる少年が応じた。この少年の言葉はいくぶん詠嘆的で、金網ごしの外界にたいする羨望がこめられていたが、ちえッ、と軽くさげんだ少年の態度には反抗の響きがあった。行助は仲間のやりとりをききながら、なぜ俺は少年院送りになったのか、と自分の内面を覗きこんでいた。彼は、他の少年達のように詠嘆的にも反抗的にもなれなかった。

「練鑑できいた話だが、俺達がこれから入る多摩少年院は、少年院のなかの学習院だよ」
ちえッ、とさげんだ少年が言った。

「学習院とはわらわせるな」

外には色がある、と言った少年が答えた。

「おまえ、いやに大人ぶっているが、なにをやったんだ？」

「窃盗よ。おめえは？」

「俺は盗んだのさ」

「おたがいになりたいことはしていねえな。奴はなにをやったのだろう。奴の方が俺より大人ぶっているぜ」

「きいてみるよ」

「おい、おまえ、なにをやったんだ？」

外には色がある、と言った少年が行助の肩をたたいた。

「俺は人を刺した」

行助は外を見たまま面倒くさそうに答えた。すると二人は一瞬だまりこんだ。

「おめえ、いやに貫禄があるように見せかけるが、相手のどこを刺したんだね」

外には色がある、と言った少年が、再び行助の肩をたたいた。

「それがきみとなんの関係がある？　うるさいからすこし静かにしてくれ」

行助ははじめてその少年の方をふり向いて答えた。

「きみだとよ。おめえ、目白の学習院出身か。いやに雅た言葉を使うじゃねえか。おい、みんな、きいたか。奴は、おめえ、とよばずに、きみ、と俺を尊敬してよんだ。奴は、目白の学習院で學術優秀、品行方正のお免状をもらい、これから多摩少年院に進学するところだ」

すると他の者が声をたててわらった。わらい声に、運転席のとなりに掛けている法務教官が窓をあけてこつちをみた。少年達はいっせいに姿勢を正した。やがて窓が閉った。

「俺は宇野行助という。きみの名は？」

行助はとなりの少年を見て訊いた。

「俺は安坂宏^{からだ}」だ」

と少年は軀^{からだ}を前にのりだすようにして行助を見かえして答えた。少年達は二列に並んでむかいあって腰かけていた。行助が見ると、少年は、左手の薬指の背に、幾子、と刺青^{いれずゐ}がしてあった。

「安坂宏^{からだ}か。憶^{おぼ}えておこう」

「通称を安という。俺はすじもんだ」

「すじもん？」

「おまえ、堅氣^{ちようき}の学生^{せいがく}だな。すじもんとはやくざのことよ」

「そうかい」

行助は再び金網ごしに外に視線を移し、この少年は俺より二つは年嵩^{としかき}だな、と思った。行助は少年鑑別所では独居房にいた。独居房は畳の部屋で、そこにベッドが置いてあり、本とラジオとテレビが備えつけてあった。しかし彼はラジオも聴^きかなければテレビも視^みなかった。

彼が、傷害事件をおこして世田谷の成城警察署から家庭裁判所を経て東京少年鑑別所に送られたのは、四月初旬であった。公立高等学校の二年生に進級し、学校に通いだしてから幾日も経^かたない日であった。彼は、鑑別所に高等学校の教科書を差し入れてもらい、それを自習しながら鑑別期間の四週間をすごしたのであった。その間、彼は、少年鑑別所と家庭裁判所を二度往復した。その結果、中等少年院に送致、と審判されたとき、これで俺の進路はある程度変ってしまった、とはっきり感じた。後悔はなかったが、為^{ため}体の知れない苦いものがこみあげてきた。

少年鑑別所長は平山亮という五十がらみの人で、親切だった。所長は、相手を刺した行為はも

ちろん悪いが、刺した動機が大切だから、それをきかせてもらいたい、と何度も行助を諭すように言ってくれたが、彼は最後まで動機を語らなかった。

「おい、刺した相手はどんな奴だった？」

再び安坂宏一が行助の肩を叩きながら訊いた。

「だまっていてくれないか」

行助は迷惑そうに答えた。

「だまっているだろ？　おい、俺は二度目の少年院入りだ。判らないことがあったら教えてやろうと言っているんだ」

「教えてもらわなくともいい。きみは少年院行きに慣れているんだな」

「慣れているだって？　おい、冗談おっすなよ。俺は好きこのんでこんな車に乗っているわけじゃねえ。情婦が子供を孕みやがってよ、金が必要になつてな……」

「きみはいくつだい？」

行助は訊いた。彼も情婦をまぶと呼ぶ隠語ぐらいは知っていた。

「番茶も出花の十八よ。女は二十だ。ちくしょうッ！　もう、ごらんがうまれる頃だというのに、俺は刑務所入りだ。奴、どうしているのかなあ」

行助は安坂の言うのをききながら、この少年は案外気がいいのかも知れない、と思った。そして彼は再び外の新緑に目を移し、兄を刺した日の午後を想いかえた。それはまことに気の遠くなるような午後であつた。

それは、悪夢のような半日であつた。行助は、いまでもその半日の陽のながさを憶えている。高等学校は世田谷の粕谷町にあつた。学校からは芦花公園がちかかった。行助の家は、成城町

の北のはずれにあり、祖師谷と調布市に隣接していた。彼は、粕谷町の学校に通うのに、歩いて祖師谷を通りぬけた。いつも安穩寺という寺の前を通った。彼は寺が好きだった。寺には想い出があった。父の矢部隆の骨を埋葬しに行った五歳の春、母の澄江が泣いていたのを、彼はながく記憶にとどめていた。その寺は鎌倉の円覚寺であった。小学校の四年生になったとしの春、再婚する母につれられて東京に越してくるまで、彼は年に数回母とつれだつて円覚寺の父の墓所に詣でた。いま、彼の記憶にあるのは、季節の色に染まつた円覚寺の境内である。東京に越してきたこの九歳の春らしい、彼は円覚寺を知らなかったが、しかし彼の裡では季節の色に染まつた寺の周辺が生きていた。真白く粉を噴いたような五月の木の芽、蟬しぐれの夏の午後、樹木から一枚いちまい葉が剥がれて行く十一月のしずかな暮方……彼は東京に越してきてからも、いつもそんな季節感を求めては寺のそばを歩いた。しかし東京には円覚寺のような寺はなかった。安穩寺は小さな寺であった。しかし寺のたたずまいはいつも彼の心をやわらげてくれた。この日、彼は午前中で授業を終え、いつものように安穩寺の前を通って帰宅した。腹がへった、なにかこしらえてあるだろう、と思いながら玄關をあけたとき、奥から母のさげび声がきこえてきたのである。

行助は咄嗟に式台にカバンを投げだし、廊下を奥に走った。そして茶の間の襖をあけたとき、彼は息をのんだ。

兄の修一郎が母の上にのしかかっていたのである。澄江は髪をふり乱し両腕を修一郎の胸に突きあげて抵抗しており、着物をまくられた下半身があらわだった。あり得ない光景であった。行助は見てもならぬものを見た、という思いと、修一郎にたいしての怒りが噴きあげてきた。修一郎がなにをしようとしているのかを瞬時のうちにさとした行助は、いきなり修一郎の頭をうしろ

から殴りつけ、首に腕をまわして引きずりおろした。

「野郎ッ！」

修一郎は行助の腕を振り放すと台所に駆けて行き、右手に出刃庖丁をにぎってきた。

「ちくしょうッ、母子で俺を馬鹿にしやがったな！」

酒のおいがした。

行助は、ジーパンに色もののシャツ姿で出刃を握って戻ってきた兄をみたとき、これで血の繋がっていかない二つ違いのこの兄とのあいだもおしまいだな、と感じた。出刃庖丁を向けられて恐怖はなかったように思う。行助の心に充ちてきたのは崩壊感覚であった。そこに微かな哀しみともなった。

「修一郎さん、やめて！」

澄江が両手で自分の頭を掴みながら叫んだ。

「うるせえッ、てめえ達は俺とは他人だ！」

修一郎がさげびかえた。修一郎と行助のあいだには卓袱台があるきりだった。

行助は、いつかはこんな日が訪れてくるのを、心のどこかで知っており、それを慮っていた。ことのきっかけはなんでもよかった。血の繋がっていないこの兄と、取っくみあいの喧嘩をしたことはない。いつも陰にこもった争いをしてきた。争ったといっても、行助の方から争いを仕掛けたことはない。いつも、修一郎の一方的な言いがかりを、行助は母といっしょにだまってきただけであった。

修一郎は、この三月に、近くの私立高等学校を出て、神田のある私立大学の経済学部、二百万円の金をつんで裏口入学をしたが、ここまで修一郎を墮落させたのはもちろん父の宇野理一で

あった。理一も修一郎も、それを墮落だとは考えていないほど、都会の消費生活に慣れきっていた。

行助は、兄が金で裏口入学した件については、母と話しあったことはない。ただ、母が、父の依頼でその私大の理事の家に金を届けに行ったことだけは知っていた。

しかし、このきっかけは余りにもひどいではないか、と行助は乱れた着物を直しながら修一郎を宥めていた母を見て思った。血が繋がっていないとはいへ、母子ではないか。

「兄さん、庖丁をおろしてくれ」

行助は哀しかった。

「俺はおまえの兄ではない！」

修一郎はあきらかに理性を失っていた。やはり酒のにおいがした。母を犯そうとした現場を見られ、彼は逆上していた。劣等感の捌けぐちを刃物に託していた。行助は修一郎のそんな面を知りすぎるほど知っていた。

「修一郎さん、やめて！」

澄江がおろおろしながらもう一度言った。

「うるせえッ。てめえはこの家の女中じやないか。俺のおふくろのような面をするなッ！」

行助が卓袱台に右足をひっかけて両手で持ちあげ、それを修一郎に投げつけたのは一瞬の出来事であった。修一郎が庖丁を畳におとし、修一郎と行助の腕が同時に庖丁にのびたが、行助の方が早かった。二人は庖丁を奪いあつて鎚れた。そして、庖丁がどうして修一郎の右腿に刺さってしまったのか、行助はまったく憶えていない。

修一郎は異様なさけび声をあげて部屋から庭にとびだすと、この四月に理一から買ってもらっ

たベンツに乗り、やはり異様なさけび声をあげて出て行ってしまった。

気がついてみたら行助は右手に出刃を握っていた。不思議なことに出刃には血がついておらず、畳に血が散っていた。

「行助……どうして、こんなことを……」

澄江はべたっと坐りこんでしまった。行助が見ると澄江のくちびるがふるえていた。行助はこのとき畳に散っている血を視つめながら冷静だったように思う。刺そうなどという気持はまったくなかった。しかし現実には刺していた。何故か？ 修一郎にたいしての憎しみが、無意識のうちに行為になって出てしまったのか……。

「お母さん、警察に電話をしよう」

「おまえ……そんなことを！」

澄江は息子の足もとににじり寄った。

「それで、おまえ、刺した相手が死んだわけじゃあるめえ。もつとも、ろくっていりや、いま頃、学習院になど送られるはずがねえものな」

再び安が話しかけてきた。

「きみは二度目の少年院入りだと言っていたが、やはり多摩に入ったのかい？」

行助はこの少年にすこしばかり親しみを覚え、訊きかえした。

「いや、千葉よ。初等少年院といつてな。三年前だ。ああ、ああ、また麦飯ばくしやうを食ってくらすんだ。いやんなっちゃうな。おまえ、父親さふにんと母親はははいるのかい？」

「いるよ」

行助は、この少年は集中してものを考えることの出来ないたちだな、と思いながら外を見た。

このとき行助は、安から、父はいるのか、と訊かれ、七年前、母といっしょに宇野家に来た頃をおもいかえしていた。あれは、ちょうどいま頃の季節だった……。行助は小学校の四年生で、修一郎は六年生になった別れ霜の季節だった。考えてみればおかしな話だった、と行助は当時をおもいかえた。九歳と十一歳の少年が、今日からきみと僕とは兄弟だ、と言いいいながら、しかし二人の少年はそれを本当だとは思っていなかった。二人の少年のあいだで溝が出来たのは、あるいはこの最初の出発の日だったかも知れない。二人の少年は、おたがいに、父をとられ、母をとられた、と考えていたのかも知れない。……俺はあの日、修一郎を刺した日の午後、出刃を握ったまま、宇野家に來てからの年月を反芻していたのかも知れない。

三人の警官が宇野家に現われたのは、行助が成城警察署に電話をした直後だった。修一郎がベンを運転して家を出てから十分と経っていなかった。三人のうち一人は私服だった。

「矢部行助という学生がいますか？」

と迎えにでた行助に年輩の警官が訊いた。

「矢部？……ええ、僕が矢部行助です」

行助は、咄嗟にすべてを理解した。修一郎は、女中と女中の息子に刺された、と警官に告げたにちがいない。

このとき、あたふたと澄江が出てきた。

「おい、この少年を押えている。矢部澄江だな。茶の間はどこだ」

その年輩の警官は、髪が乱れている澄江を見ると、いきなり靴をぬぎ式台にあがり、澄江をうながして奥に入って行った。若い警官の一人が行助の右手首に手錠をかけたのはこのときである。

瞬間的な出来事だった。あわてて母に従って茶の間に行こうとしたとき、おい、どこへ行く！と若い警官が鋭い声を浴びせた。手錠はこのときにかかった。奇妙な一瞬だった。手首に冷たい重みを感じたとき、なぜか亡父矢部隆の顔をおもいうかべた。なぜあのとき父の顔がおもいうかんだのか……俺はあのとき無意識のうちに亡父の笑顔と手錠の冷たさをおもい比べていたのか。行助は、手首にかけられた手錠は見ずに、若い警官の鋭い目を視つめ、もしかしたら俺はこの冷たさと重さを生涯忘れないかも知れない、と思った。手錠は、手首に食いこまず、行助の頭の中に食いこんできたのである。

澄江は茶の間に二人の警官を案内して畳に散っている血を見たとき眩暈がした。

「そのままらしいですな」

と私服が白い手袋をはめた手で出刃庖丁をつまみあげながら言った。

「行助が……行助が、このままにしておけと言ったんです」

澄江が私服のつまんだ出刃を見て答えた。

「あなたの息子がそう言ったのか？」

年輩の警官がきいた。

「そうです」

「この家の奥さんはいないのか？」

「わたしが、この家の主婦です」

「あなたが奥さん？ 矢部澄江は？」

「わたしです。……矢部は、むかしの姓です」

澄江は答えながら坐りこんでしまった。

このとき二人の私服が入ってきて、

「あの少年が電話で署に自首してきました」

となかの一人が言った。

「われわれが出た後か？」

年輩の警官がその若い私服を見て訊いた。

「そうです」

「あなたの息子が署に電話をしたのか？」

年輩の警官が今度は澄江を見おろして訊いた。澄江は返事のかわりにうなずいて見せ、修一郎さんは大丈夫ですか？ と警官を見あげて訊いた。すると、

「刺された子はどうか？」

と年輩の警官が若い私服を見て訊いた。

「いま処置を受けています。木下病院です」

それから現場検証がはじめられた。電話で呼び戻された宇野理一が帰宅したのは、それから一時間後だった。新宿まで使いにでた若い手伝女の佐藤つる子が帰宅したのもこの時分だった。

やがて佐藤つる子を残し理一と澄江は警察署に同行を求められた。行助は一同より先に警察署に連行されていた。

署についてから、まず理一が二人の子の父親として取りしらべを受けた。

「修一郎くんは、澄江さんと行助くんに刺された、と言っておりますが」
刑事が言った。

「澄江がそんなことをするはずがありません」